



山口 建(やまぐち・けん)氏
県立静岡がんセンター総長
1974年慶応義塾大医学部卒。99年国立がんセンター研究所副所長。同年宮内庁御用掛就任。2000年高松宮妃がん研究基金学術賞受賞。02年より現職。厚労省「地域がん診療拠点病院のあり方に関する検討会」委員や(財)日本対がん協会評議員。研究領域は乳がん治療、腫瘍マーカー、がんの社会学。

東日本大震災

今回の大震災では、約3万人の人びとが命を落としたり行方不明となり、数十万人が被災したりしました。幸せな、あるいは平穏な暮らしが一瞬のうちに暗転し、家族や同居や職を失い、深い悲しみや、やり場のない怒りを抱えながら不自由な生活を送って

豊かな心を育むために

この姿は、暮らしの全てを破壊したかに見える自然の猛威も、勇気や希望までは奪い去ることができなかったのだと

豊かな心

豊かな心には、磨かれた心の三要素とともに、その調和が大切です。

豊かな心には、磨かれた心の三要素とともに、その調和が大切です。

折る心

不安を押さえ、心の平穏を取り戻すために役立つ行為

心の若さを保つために

「四苦八苦」という熟語があります。この語源は、釈迦が生老病死を四つの苦しみとして説いたことに由来します。若い間は、よほどの苦難に直面しない限り、この言葉を実感できませんが、年を重ねると、病を思い、死を意識するようになるとその意味が深く理解できます。そういうときには、心も老いた気持ちになってもいいです。高年齢者の多くが、身体が衰えると心も老いてしまったと勘違いをしていますが、幸いにも私たちの心は老いる臓器ではありません。

タウンミーティング ◆質疑応答◆

事前や当日寄せられた質問を中心に質疑応答が行われました。紙面の都合により、本講座の内容に即した質問事項をまとめました。

がんを知る ~最新医療と暮らしの応援~

静岡県立静岡がんセンター公開講座第7弾「がんを知る ~最新治療と暮らしの応援~」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、静岡県立大学共催、スルガ銀行特別協賛、静岡市後援)の最終回が3月26日、静岡市民文化会館で開かれ高橋かおる乳癌外科部長と、山口建総長が「乳がん検診と早期発見」、「心の豊かさ」を求めて」をテーマに講演しました。その概要をお伝えします。

2011年度静岡県立がんセンター公開講座は三島市の三島市民文化会館で9月からの7回シリーズで開催予定です。お問い合わせは静岡新聞社企画事務局<電054(284)8927>へ。

早期なら10年生存率9割

乳がんは、進行度合いにより、0期からⅣ期に区切られます。がんが2センチ以下でリン

心の絆

豊かな心から生み出される連帯感が「絆」です。大きな不幸や苦難を迎えたとき、それを支えるのは家族や周囲の人たちとの絆です。大震災でも、地域の人たちが協力して困難を克服する姿が随所に見られました。社会全体から

折る心

不安を押さえ、心の平穏を取り戻すために役立つ行為

心の若さを保つために

「四苦八苦」という熟語があります。この語源は、釈迦が生老病死を四つの苦しみとして説いたことに由来します。若い間は、よほどの苦難に直面しない限り、この言葉を実感できませんが、年を重ねると、病を思い、死を意識するようになるとその意味が深く理解できます。そういうときには、心も老いた気持ちになってもいいです。高年齢者の多くが、身体が衰えると心も老いてしまったと勘違いをしていますが、幸いにも私たちの心は老いる臓器ではありません。

がんの検診や検査で浴びる放射線量が心配です。日常生活での年間被ばく量は2.4mSv(ミリシーベルト)です。一方胸部CTスキャン1回の被ばく量はおよそ7mSv(ミリシーベルト)です。高い数値だと感じるかもしれませんが、検査で得られる利益がより大きいと考えています。検査でがんが早期に発見されれば、治療を受けて命を救うことができます。また、治療に必要な検査であれば、正しい病状を把握し、誤った治療を防止することも役立ちます。さらに、今までの研究で100mSv(ミリシーベルト)以下の年間被ばく量では健康被害は明らかになっていません。ただし、健康であれば、被ばくを出来るだけ減らすため、医学的に不必要な検査は避けるべきです。

肥満と女性ホルモンが起因

乳がんは日本人女性で急増しており、最近では年間約5万人が罹(り)患、1万2000人あまりが命を落としています。30-64歳の年代では死亡率でも女性のがんのトップで、生涯の間に乳がんにかかる女性には16人に1人ともいわれています。

乳がん検診と早期発見

乳がんは日本人女性で急増しており、最近では年間約5万人が罹(り)患、1万2000人あまりが命を落としています。30-64歳の年代では死亡率でも女性のがんのトップで、生涯の間に乳がんにかかる女性には16人に1人ともいわれています。

早期なら10年生存率9割

乳がんは、進行度合いにより、0期からⅣ期に区切られます。がんが2センチ以下でリン

心の絆

豊かな心から生み出される連帯感が「絆」です。大きな不幸や苦難を迎えたとき、それを支えるのは家族や周囲の人たちとの絆です。大震災でも、地域の人たちが協力して困難を克服する姿が随所に見られました。社会全体から

折る心

不安を押さえ、心の平穏を取り戻すために役立つ行為

心の若さを保つために

「四苦八苦」という熟語があります。この語源は、釈迦が生老病死を四つの苦しみとして説いたことに由来します。若い間は、よほどの苦難に直面しない限り、この言葉を実感できませんが、年を重ねると、病を思い、死を意識するようになるとその意味が深く理解できます。そういうときには、心も老いた気持ちになってもいいです。高年齢者の多くが、身体が衰えると心も老いてしまったと勘違いをしていますが、幸いにも私たちの心は老いる臓器ではありません。

がんの検診や検査で浴びる放射線量が心配です。日常生活での年間被ばく量は2.4mSv(ミリシーベルト)です。一方胸部CTスキャン1回の被ばく量はおよそ7mSv(ミリシーベルト)です。高い数値だと感じるかもしれませんが、検査で得られる利益がより大きいと考えています。検査でがんが早期に発見されれば、治療を受けて命を救うことができます。また、治療に必要な検査であれば、正しい病状を把握し、誤った治療を防止することも役立ちます。さらに、今までの研究で100mSv(ミリシーベルト)以下の年間被ばく量では健康被害は明らかになっていません。ただし、健康であれば、被ばくを出来るだけ減らすため、医学的に不必要な検査は避けるべきです。



高橋 かおる(たかはし・かおる)氏
県立静岡がんセンター乳癌外科部長
1986年浜松医科大学卒。同年東大第二外科入局。東京船員保険病院外科、東京都立墨東病院外科などを経て、94年より癌研究会付属病院(2005年より癌研有明病院)乳癌外科。06年から静岡がんセンター乳癌外科部長。

このほか、良性の乳腺の病気が一度乳がんになった方が、家族内に乳がん患者がいる方は、乳がんになりやすい傾向があります。この場合、遺伝する乳がんも一部ありますが、多くは家族内で食生活や体質が共通していることが原因と推察されます。

早期発見するための重要なのが「自己触診」です。乳房だけでなく全体を広く触ることが重要です。乳腺は鎖骨の下から肋骨(ろっこつ)の下部までを覆うように広がっています。反対側の手のひらを

早期なら温存手術も

乳がんには手術、放射線治療、薬物療法を合わせた「集学的治療」を行います。現在行われている手術は、乳房を残す「乳房温存」が6割、乳房切除が4割です。

心の若さを保つために

「四苦八苦」という熟語があります。この語源は、釈迦が生老病死を四つの苦しみとして説いたことに由来します。若い間は、よほどの苦難に直面しない限り、この言葉を実感できませんが、年を重ねると、病を思い、死を意識するようになるとその意味が深く理解できます。そういうときには、心も老いた気持ちになってもいいです。高年齢者の多くが、身体が衰えると心も老いてしまったと勘違いをしていますが、幸いにも私たちの心は老いる臓器ではありません。

がんの検診や検査で浴びる放射線量が心配です。日常生活での年間被ばく量は2.4mSv(ミリシーベルト)です。一方胸部CTスキャン1回の被ばく量はおよそ7mSv(ミリシーベルト)です。高い数値だと感じるかもしれませんが、検査で得られる利益がより大きいと考えています。検査でがんが早期に発見されれば、治療を受けて命を救うことができます。また、治療に必要な検査であれば、正しい病状を把握し、誤った治療を防止することも役立ちます。さらに、今までの研究で100mSv(ミリシーベルト)以下の年間被ばく量では健康被害は明らかになっていません。ただし、健康であれば、被ばくを出来るだけ減らすため、医学的に不必要な検査は避けるべきです。